国際理解教育/開発教育　学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	安生　留衣	学校名	上越市立大町小学校
教科(科目)・領域	外国語(英語)	対象学年(人数)	6 年 1 組(33 名)
実践年月日もしくは期間(時数)		2025年 8月29日 ～ 10月3日(5 時間)	

【実践概要】

1. 単元名(活動名): 同じまちで生活する仲間 ～ハロハロから広がる国際理解～

2. 実践する教科・領域
英語(英語専科)

3. 学習領域

	1	2	3	4
A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
B グローバル社会	相互依存	情報化		
C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	

4. 単元の目標(評価規準を意識して設定)
・フィリピンのデザート「ハロハロ」をきっかけに、フィリピンの文化や言語に親しみをもつ。
・日本と似ている点・違いに気付き、異文化理解を深める。
・自分たちのまちに住む外国の人々を身近に感じ、共に生きるために大切なことを考える。

5. 単元の評価規準

①知識・技能	・フィリピンの文化(ハロハロや生活など)について理解している。 ・自分の経験や感想などを簡単な学んだ英語を使って表現することができる。 (例:I ate halo-halo. It was sweet. / I like it. 等) ・簡単な英語を使って自分のまち(上越)の良さを紹介している。
②思考・判断・表現	・フィリピンと日本の文化の似ている点・違う点を、英語や日本語を交えて伝えることができる。 (例:Halo-halo is colorful. We have shaved ice.等) ・自分たちのまちに住む外国の人々と「どのように共に生きていくか」について、自分の考えを表現している。
③主体的に学習に取り組む態度	・フィリピンの文化や人々に親しみをもち、前向きに学ぼうとしている。 ・自分のまちに住む外国の人々を身近に感じ、共に生活するために大切なことを考えようとしている。 ・相手の文化を尊重しようとする姿勢を持ち、共生への関心を高めようとしている。 ・相手に質問したり、やり取りしたりする交流活動に主体的に取り組んでいる。(Do you like～? / We have ～等)

6. 単元設定の理由・単元の意義
【単元設定の理由あるいは単元の意義】
上越市には現在、2340 人の外国人市民が暮らしており、そのうちおよそ 970 人はフィリピン出身の人々である。こうした地域の実態は、国際理解教育が「遠い国の文化を学ぶこと」にとどまらず、「自分たちが暮らすまちの仲間を理解すること」であることを示している。
本単元では、フィリピンの代表的なデザートである「ハロハロ」を題材に取り上げる。調理実習やフィリピン人保護者との交流を通して、児童はフィリピンの食文化や暮らしを五感で体験的に理解することができる。さらに、同じ学校や地域で生活する外国の人々の存在を意識し、多様な文化を持つ人々と共に生きるために必要な態度や考え方を育むことを目指す。この学びを通して、児童は「世界の人々とつながる」という国際理解の視点とともに、「地域社会の一員として共に生きる」という多文化共生の視点を身につけ、より広い視野を持って自分や周囲の生活をとらえる力を養う。

【児童／生徒観】

本学級は児童 33 名に加え、特別支援学級の児童 1 名が在籍している。特別支援学級の児童は多くの時間を学級外で過ごしているが、体育やマーチング活動、給食などでは共に過ごしている。活動を共にするだけでなく、言葉を交わすことも難しい相手であるが、その子の様子を見ながら、今何を欲しているのか、どんな気持ちなのかを察し、代弁したりするなど、相手に心を寄せようとする姿勢を持っている児童が多い。

本学級は3年生の外国語活動から指導している。在籍児童には中国にルーツを持つ児童がおり、以前、旧正月の話を聞く機会があった際、とても丁寧に説明してくれ、他の児童も興味深く聞いていた。英語に苦手意識を持つ児童も数名いるが、外国の文化や日本との違いには強い関心を示している。外国語の学習に対しても、「英語を話せるようになりたい！」という意欲を持つ児童が多く、言語活動では互いに掛け合い、会話練習を行うなど、前向きな姿が見られる。

【教材観】

1 学期の終わり、子どもたちは教科書の異文化理解ページでフィリピンのデザート「ハロハロ」と出会い、興味を抱いている。「ハロハロ作り」の調理実習をきっかけに、本校在籍のフィリピン人保護者と出会い、話を聞くことができる。また、在住外国人を支える機関「上越交流協会 JOIN」の活動や「やさしい日本語」などについても知ることで、地域で生活する難しさにも目を向けられる。さらに、中国にルーツを持つクラスメイトの家族の話も聞きながら、自分たちができることや、共に暮らす上で大切なことを考えさせていく。

【指導観】

本単元では、フィリピンのデザート「ハロハロ」をきっかけに、子どもたちがフィリピンの文化に触れ、日本との共通点や違いに気づくことをねらう。さらに、同じ学校・地域に暮らす外国の人々の存在を身近に感じ、共に生活する上で大切なことについて考える姿勢を育てたい。指導にあたっては、以下の視点を重視する。

① 体験を通した学びの重視

・調理実習やフィリピン人保護者との交流を通して、子ども自身の感覚で文化を理解する体験型活動を中心に据える。

・英語で簡単な表現を用いて、自分の経験や感想を伝える活動を取り入れ、言語活動と文化理解を結びつける。

② 異文化理解と共生意識の育成

・フィリピン文化や地域で暮らす外国人の生活の話を聞くことで、児童が自分の文化だけが「当たり前」ではないことに気づくよう支援する。

・在住外国人を支える機関（JOIN など）の活動や「やさしい日本語」について知ることで、共生に向けた考えを深める。

③ 児童の関心・意欲に応じた指導

・英語に苦手意識を持つ児童も含め、全員が安心して活動に参加できる環境を作る。

・日本語と英語を交えて考えや感想を伝えることを認めるなど、児童の発達段階に応じた指導を行う。

④ 対話と協働の促進

・ペアやグループで意見交換や会話練習を行い、互いの考えを尊重しながら表現する力を育てる。

・調理や発表活動を通じて、他者の考えに寄り添い、協力して学ぶ姿勢を養う。

7. 単元計画（全 5 時間）

時間	ねらい	学習活動	資料など
1 本時	【体験】 ハロハロ（食）をきっかけに相手を知る	・フィリピンにルーツがある ALT と、フィリピン人保護者（ノブレッタさん）と一緒にハロハロ作り ・フィリピンの文化や簡単な挨拶を学ぶ	・フィリピンの基礎知識となる資料（地図、位置） ・ノブレッタさんから提供してもらった写真
2	【気付き・比較】 ・フィリピンと日本の「似ている・ちがう」を見つけよう	・前時の振り返り（ハロハロの味や感想）を学んだ英語で伝える （I ate halo-halo. It was sweet 等） ・写真や資料から「フィリピンの食べ物・学校・遊び・住まい」を紹介 ・グループで「日本とフィリピンの似ていること・違うこと」をカードに書き出し、共有	・前時で使用した資料や写真
3	【交流・自分事化】 ・同じまちに住む外国の人たちを知ろう ・ノブレッタさんに上越のおすす	・上越市に住む外国人の人数や国籍（グラフや地図）を提示 ・上越にもフィリピンの人や外国から来た人がたくさんいるということへの気づきをもつ	・「上越の国際化を考える」、「創造行政」（上越市創造行政ニュースレターNo.44, July.2019）

	めを紹介しよう ・ノブレッタさんに上越の好きなところ、驚いたこと、困っていることを聞いてみよう （フィリピン人保護者来校） ・上越地域の外国人をサポートしている JOIN の活動紹介	・児童がこれまで総合で学んだことを英語の既習表現を用いて紹介する 例：Do you like coffee? We have “machiya cafe”. You can eat sandwich and coffee. ・「上越の好きなところ」、「驚いたこと」、「困っていること」などをノブレッタさんに質問する。（ALT との対談形式や児童による質問） ・上越に住む外国人を支える JOIN の活動を紹介する ・ノブレッタさんの話を聞いて思ったことや考えたこと、感想をワークシートに記入する。	・上越交流協会 JOIN ホームページ（活動内容）
4 【本時】	【まとめ・表現】 共に生きるために大切なことを考えよう	・単元全体を振り返り、共に暮らす上で大切なこと、自分達ができることを考える	・これまでの活動写真 ・上越交流協会 JOIN の方の言葉を紹介する
5	【まとめ・英語表現】 共に生きるために大切なことを「英語」で言ってみよう！	【フォローアップ＆チャレンジタイム】 ・前回の振り返りをもとに同じまちで共に生きるために大切だと思うことを英語で表現する ・We can understand each other. ・I want to study English. ・I want to understand each country and culture. ・Let’s have good communication!など	・前時に記入したワークシート

8. 本時の展開（概略）

本時のねらい：（4／5時間）

・単元全体の学びを振り返り、地域で共に暮らす上で大切なことや自分にできることを考え、表現している。

・英語の簡単な表現や日本語を交えながら、自分の考えをまとめて伝えている。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 （15 分）	**①　これまでの活動を振り返る** **T：「今日は単元全体のまとめとして、私たちが外国の人たちと共に暮らすために大切なこと、自分たちにできることを考えたいと思います。まずはこれまでの学習を振り返りましょう」** **T：「まずは、8/29 のハロハロ作りからです」** C：「ハロハロ作りが楽しかった、また食べたい」 C：「いろいろな材料を使っている」 C：「ハロハロは甘かった」 C：「日本のかき氷やみつ豆がフィリピンに伝ってハロハロになった」 C：「混ぜすぎると甘すぎて美味しくない」 **T：「ノブレッタさんから教えてもらったことを覚えていますか？」** C：「マノっていう、あいさつ」 C：「お祭りでの食事が豪華なところは似てる」 C：「クリスマスの準備は、9月から始まる」 C：「7歳、18 歳、21 歳でお祝いする。七五三とか成人式と似ている」 C：「フィリピンの民族衣装は、パイナップルの葉っぱからできている」 C：「みんなで食事を分かち合う」	・3～4 人グループに分かれておく ・これまでの活動を想起できるよう、活動した時の写真などを掲示する 	・本単元での学習で使用した資料や写真

T:「このように、日本とフィリピンの似ているところや違いを教えてもらいました。みなさんはどう感じましたか？」
C:「結構似てる」
C:「水が安い」
C:「島がめっちゃ多い」

T:「この前、ノブレッタさんが来てくれた時に、水のことをお聞きしましたね。またノブレッタさんには、上越のよさを紹介しました。ノブレッタさん上越のどんなところを好きと言っていたか覚えていますか？」
C:「優しさ。あと綺麗、静かって言ってた」
C:「日本語が上手く話せなくても分かってくれようとする」

T:「日本のどんなところに驚いたと言っていましたか？」
C:「トイレが綺麗」
C:「(アメリカ人 ALT)ジェニファー先生もそうだって言ってた」
ALT:「そうそう公衆トイレ、スキー場、山も」

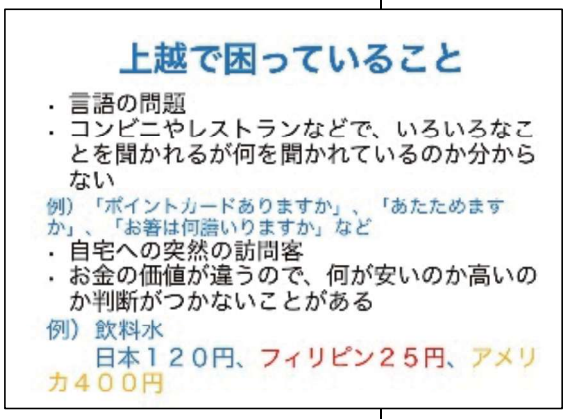
T:「では反対に日本で困っていることはどんなことか覚えていますか？」
C:「コンビニでいろいろ聞かれるって…支払いは？お箸は？温めますか？」
C:「お金の価値」
C:「水の値段が、フィリピンは 25 円、日本は 120 円くらい、アメリカは 400 円」

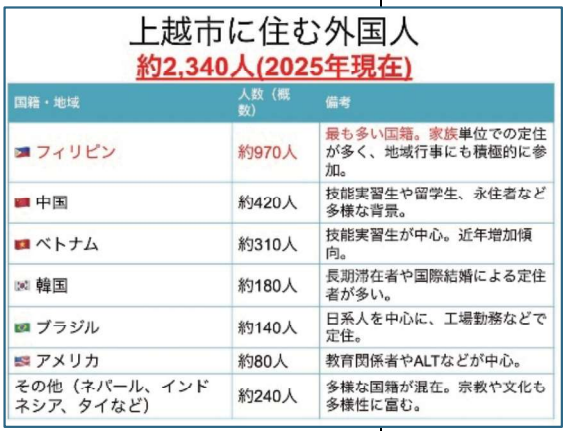
T:「みなさんからの質問にあった、フィリピンの米不足について。日本と同じく主食は米だから、フィリピンでも米不足があるんじゃないかと尋ねてみたところ…」
C:「米不足はあるって言ってた」

T:「そうでしたね。なぜかというと、台風も来るし、気候に左右されるとのことなので、日本と変わらないということでした。だけど、主食なので、高くても米を買うということでした。ジェニファー先生はお米が高かったらどうですか？」
ALT:「I'll buy bread. If bread is expensive, I'll buy pasta or oatmeal.」
C:「お米じゃなくても大丈夫なんだね」

T:「そして・前回紹介した JOIN の活動も覚えていますか？どんな人たち人たちでしたか？」
C:「サポートしてくれる人」
C:「病院とかで通訳してくれる」
C:「料理教室とかも」

T:「外国人の人だけではなく、日本人の私たちも参加して交流できるようなイベントも企





	画してくれています。前回の感想には、JOIN の活動に対してすごく興味をもってくれている人もいましたよね。さまざまな面から外国人の方を支えているということでした。では、上越に住む外国人はどのくらいいるか覚えていますか？」 C:「フィリピンの人が一番多い、970 人くらい」 C:「全部で 2370 人、タイとインドネシアと…」 T:「OK, Let's check!　Thailand, India, Indonesia, Nepal, Philippines, America, China, Korea, Brazil, Vietnam」 T:「このように、いろいろな国の人達と共に、今の上越市があります。その一人がノブレッタさんやジェニファー先生ということになります。今日は、「同じまちでいろいろな国の人が共に生きるために大切なことは何だろう」ということを考えていきます。まずはこれまで3回の授業を振り返り、今みなさんが考えていることをシートに書いてもらいます」	 ・国旗を示しながら、児童と一緒に英語で国名を確認する	
展開 （20 分）	**②　単元全体の振り返り** **（個人→小グループ交流）** T:「この国際理解の学習を通して、『楽しかったこと』『驚いたこと』『印象に残ったこと』を各自ワークシートに記入し、小グループでお互いの内容を紹介し合いましょう」 **【ワークシート　児童の記述より】** C:「ハロハロ作りが楽しかったです。フィリピンの文化なども知れたし、学びながら楽しくできました。驚いたことはフィリピンもお米の文化があるということです。印象に残ったことは、水の値段が全然違うということです。」 C:「ノブレッタさんが日本はキレイ、日本語をもっと言えるようになりたいと言ってくれてうれしかったです。」 C:「ノブレッタさんが初めて会うのに、真剣に話してくれることにびっくり！ノブレッタさんにおすすめの場所を英語で話せたのが楽しかった。」 C:「ハロハロ作りで、これとこれを混ぜると美味しいかなとか、これは好きだからいっぱい入れようと考えるのがすごく楽しかったです。材料も私が好きなものばかりで、フィリピンと合うかもと思いました。」 **③　上越交流協会 JOIN の日本語教師の言葉を紹介する** T:「前回紹介した JOIN で日本語を教える佐藤さんが、サポートをする上で大切にしていることを紹介します」 ・ノブレッタさん親子のことを知る JOIN 佐藤さんの言葉を紹介する **◆外国から来る子どもたち** 「親の都合で来日するため、母国の親せきや友達とも別れてきたなどとショックを抱えている子が多くいます。日本の学校では何を言って	・個人でワークシートに記入する時間を設け、小グループ内で紹介し合う ・インタビュー内容を抜粋して掲示する ◆在住外国人の方をサポートする上で、心掛けていること ◆共に生活していく上で、JOIN が大切だと考えていることなど	 ・教師による事前インタビュー（2025 年 9 月 18 日実施）

	いるか分からない、それでも笑顔で乗り越えている子が多いです。ポールさんもそうです。」 **◆外国から来る人々をサポートする上で大切にしていること** 「言葉（日本語）が分からないだけなのに、何もできないと感じたり、劣等感を抱いてしまうことがあります。最初はとにかく「すごいね」と、ほめてはげます。その子が日本で自信を持って楽しく感じられるように、がんばれるように心がけています。」 **◆JOIN の願い** 「私たちは、日本語を教えるだけでなく、外国人の方達が地域で活躍してもらうことを願っています。世界の料理を紹介するイベントで、自分の国の料理を日本人に教えてもらいます。自分の国の文化を伝えられるってすごく嬉しいと思います。」 **◆大切なこと** 「外国の人と共に暮らしていく上で、相互理解（お互いのことを知ること、理解し合うこと）は欠かせません。出会うこと、知ることで見方が広がります。		
	同じまちで共に生きるために大切なことは何だろう？		
	④　共に生きるために大切なことを考える **T:「これまでの学習を通して、学んだことや考えたことを基に、『自分にできること』『大切にしたいこと』を、まずグループで話し合いましょう。それから各自ワークシートに、自分が考えたことや気づいたことを書きましょう。** **【児童の発言、ワークシートの記述より】** C:「笑顔や言葉、相手の事を思いやる気持ちが大切だと思います」 C:「違いがあっても、尊重して分かち合うことだと思いました。」 C:「助け合いや協力をすること。ユニバーサルデザイン。日本語と英語で書く。」 C:「お互いにコミュニケーション、言葉を教え合う、外国人をほめてモチベーションアップ、自分からたくさん話しかける」	・3〜4 人のグループで意見を出し合い、共通点や面白いアイデアを共有できるようにする。 ・各グループにホワイトボードを配り、必要に応じて出たアイデアをメモできるようにしておく ・ワークシートには、これまでに学習した簡単な英語で言ったり、書いたりする欄も設ける。自分が言えそうな文を一つ選んで書く。 ・I want to 〜.（私は〜したいです） ・We can 〜.（私達は〜できます） ・Let's 〜.（〜しましょう）	
まとめ （10 分）	**⑤　発表・まとめ** **・ワークシートに書いた内容を発表してもらう** C:「外国人が日本語を覚えるだけじゃなくて、日本人が英語を覚えるのもいいと思います。」 C:「差別しない。お互いのことを知って仲良くなる。」 C:「いろいろな文化を知ろうと思う心、とにかくほめること、町を大切に、思いやる心、共に自分たちの国の事を知ること」 **・教師がまとめる** **T:「ハロハロの意味は『まぜこぜ』ということですよね。単なる食べ物ではなく、そこにはい**	・代表者に発表してもらう （各チームのホワイトボードをモニターに映し出すとよい） 	

	ろんなものを混ぜて良さを引き出すという意味も含まれています。それは、さまざまな国の出身の人々が共に暮らす、『多文化共生』の良さでもあります。私たちの生活も、さまざまな人々と、互いの良さを引き出しながら、よりよい文化やアイデアが生まれ、もっと面白いまち、暮らしになっていけばいいなと思っています」	・この時間で終わることではなく、今後も考えていくべき大切なことであることを児童に伝える ・最初に作ったハロハロが、「多文化共生」そのものともいえることを伝えたい	

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)

【知識・技能】

単元の学習内容を整理し、英語や日本語で表現している。(グループ活動の観察)

【思考・判断・表現】

地域で共に暮らす上で大切なことや自分にできることを考え、交流を通して伝えている。(発言、記述)

【主体的に学習に取り組む態度】

他者の考えに関心をもち、尊重しながら自分の考えを表現しようとしている。(発言、記述)

10. 学習方法および外部との連携

【学習方法】

本単元では、児童が主体的・協働的に学ぶことを重視し、以下の方法を取り入れている。

① **体験型学習**:フィリピンのデザート「ハロハロ」の調理体験を通して、食文化を五感で理解する。作業中に既習の英語表現(例:Mix it! I like it.)を使用し、言語活動と結び付ける。

② **交流型学習**:フィリピン出身の保護者をゲストとして招き、文化紹介や簡単な英語でのやり取りを行う。「楽しかったこと」「印象に残ったこと」などをペアやグループで共有する時間を設けることで、考えを深める。

③ **振り返り・表現型学習**:ワークシートを用いて「自分にできること」「共に暮らす上で大切なこと」を整理する。グループで話し合った内容や各自で考えたことをクラス全体に発表し、学びを可視化・定着させる。

④ **言語活動の統合**:教科書の既習表現を活用し、体験や交流を英語で表現する活動を組み込む。英語が苦手な児童も日本語を交えて安心して発表できる工夫を行う。

【外部との連携】

・フィリピン出身保護者:ゲストティーチャーとして来校していただき、文化紹介や生活の違いの紹介を通して、児童が外国人を身近に感じられるようにする。

・上越交流協会 JOIN:在住外国人支援の現状や具体的な活動を紹介。教師が事前にインタビューした内容を紹介することで、地域の多文化共生の取り組みを具体的に理解する。

・学校内の多文化共生の実例:中国にルーツを持つ児童やその他外国籍児童の事例を取り上げ、異文化理解の具体例として学習に活用する。(本人や家族の了承を得て)

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

① 地域の人との出会い:フィリピン出身の保護者・ノブレッタさん

事前の打ち合わせを通して、共通する遊びや文化の写真資料を準備いただき、多面的な文化理解が可能となった。児童は、文化への興味だけでなく「タガログ語や英語で話してみたい」と主体的な学びの姿を見せた。

一方的に話を聞くだけではなく、自分たちのこれまでの総合学習や英語での学びを生かして、上越のおすすめを紹介するなど、双方向の交流が生まれるように工夫した。

ノブレッタさんの「驚いたこと」「困っていること」を聞くことで、児童は当事者意識をもって地域での共生について考えるようになった。

② ALT の存在やバックグラウンドを活かす

ALT のジェニファー先生が、フィリピンにルーツをもつことを生かして、ハロハロの作り方を家族や仲間に尋ねるなど授業準備に協力してくれた。

ノブレッタさんとの授業では、英語での対談形式としたことで、「どんなことに驚いたか」「どんなことが大変か」という深い話を引き出すことができた。コンビニやトイレの違い、ペットボトルの水の比較など、身近な視点で多文化理解が進んだ。(日本・フィリピン・アメリカ)

③ 学級担任との連携

専科教員として、児童の実態は把握しにくい面がある。学級担任と相談を重ね、日頃の人間関係、発表形式、グループワークの組み合わせなど、多面的に配慮しながら授業づくりすることができた。

④ 上越交流協会 JOIN、日本語教師・佐藤さん、笹川さん

日本語教師の佐藤さんへインタビューを行い、外国人支援において大切にしている視点や、外国にルーツをもつ子どもが抱える心理的負担について深く学ぶことができた。 地域のネットワークを通して、ノブレッタさん親子を多面的に見つめる視点が児童にも生まれ、当事者意識を育てることにつながった。

【自己評価】

12. 苦労した点　※学習活動が展開する中での苦労や、そこで見えてきた問題点を記入して下さい。

ハロハロ作りを「楽しい体験」で終わらせないよう意識するあまり、当初の指導案では「多文化共生について知ること」で終わらずに、当事者意識をもってほしいという願いもあり、アクションプランまで計画していた。その結果、教師の思いが児童の実態と乖離し、学習の負担が大きくなりかねないという課題が浮き彫りになった。

13. 改善点

アドバイザーの先生から「まずは知ることを大切に」という助言を受け、児童の実態に寄り添った授業設計へ立ち返ることができた。児童の反応を想定しながら問いを練ることの大切さに気づき、担任と協働して授業を構想したことで、より無理のない学びの流れに改善することができた。

14. 成果が出た点

フィリピンにルーツをもつ ALT が媒介者となり、ノブレッタさんの経験を英語で引き出すことができ、表面的でないリアルな文化理解につながった。また JOIN の佐藤さんの具体的な語りを聞いたことで、地域の外国人の思いや現状を深く理解できた。その結果、児童は「やさしい日本語を使う」などの一般的な意見に留まらず、「自分たちも英語を学ぶ」、「仲良くする」「困っていたら動きで伝える」など、自分自身が行動する視点をもつようになった。

15. 学びの軌跡（児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど）

本単元は、**①ハロハロ作り、②文化紹介と共通点・相違点の発見、③ノブレッタさんとの交流、JOIN の活動紹介、④「同じまちで共に生きるために大切なこと」を考える**、という流れで授業を行った。

児童は、ノブレッタさんや JOIN 佐藤さんの体験や語りに触れることで、考えが深まり、心が動かされていった。「JOINの活動で、助けられている外国人がたくさんいる。外国の人と通じ合っていくのが大切だと思った」や「フィリピンに行ってみたい。JOINの活動、自分もできたらいいな。いざという時に言葉が伝わらないと大変だから助けたい」と JOIN の活動に賛同し、当事者意識を高めている児童もいる。教科書や教師の語りだけではなく、実際のモノ・ヒト・コトとの出会いが、児童の心を揺さぶり、深い思考につながっていく。

以下に、代表的な3名の児童の変容を示す。

（ア）児童Iさんの振り返り

① 「私はココナッツとタピオカが苦手でした。逆にジャックフルーツとナタデココが美味しかったです。ココナッツは初めて食べました。入れすぎると混ざってあまりよくありませんでした」
② 「（フィリピンと日本）似ているところは、遊びが似ていること、主食がご飯、いただきますがある」
③ 「ノブレッタさんの話で、上越のすきなところや驚いたことの話が面白かったです。日本のコンビニやトイレがフィリピンに比べてすごくきれいなことに驚いた。私からすると、トイレはあまりきれいではない。日本と他の国は全然違うなと思った」
④ 「お互いを理解し合ったり、分かりあったりするのが大切だなと思いました。それと言葉がけもすごく大切だなと思いました。そうしたら外国から来た人達も安心すると思います」

Iさんにとっては、初めて食べる味への驚きや苦手さの実感から始まった学習だったが、ノブレッタさんとの交流を通じて、興味深く話を聞いたり、自分の実感と比較したりするようになっている。そして「外国から来た人達も安心する」という言葉から分かるように相手に寄り添うような思考が見えてくる。

（イ）児童Mさんの振り返り

① 「ジャックフルーツが少し苦手だったけど、ノブレッタさんが甘く煮てくれたバナナがすごく美味しかったです。フィリピンの食べ物を一つ作れたし、食べられたので良かったです」
② 「日本と同じように、『ただいま』の文化がある」
③ 「ノブレッタさんに金谷山の紹介をしたら、ぜひ行ってみたいと言われたのでうれしかったです。そしてフィリピンにも米の文化があると知ってうれしかったです。これからもフィリピンのことを知りたいと思った。JOINの活動がすごいと思った」
④ 「私は外国の人と日本の人で、お互いを理解し合ったり、自分の国の文化を伝え合うことが大切だと思うし、お互い褒め合うことも大事だと思います。お互いを大切にすることもすごく大切だと思う」

中国にルーツがあるMさんは、最初から異文化への興味をもって学習に臨んでいたが、ノブレッタさんとの交流を通して、相手を知るだけではなく、自分のことも伝え合い、互いを尊重し合うことの大切さに気づいていることが分かる。

（ウ）児童Cさんの振り返り

① 「ハロハロ美味しかった、甘かった」
② 「フィリピンにも米文化があることを初めて知った。日本と同じように米不足の問題があるのか聞いてみたい」
③ 「JOINに行ってみたい。「英語でしゃべり場」で、英語でいろいろな人と話してみたい。やっぱりびっくりしたことは水が 25 円ということです。なぜフィリピンの水は 25 円で、日本の水は 120～150 円なのか知りたいです」
④ 「外国人が日本語を覚えるだけじゃなくて、日本人が英語を覚えるのも良いと思う」

Cさんは、日頃から英語学習や外国文化への興味関心が高い児童である。米不足や水の値段など常に日本の文化と比較しながら思考していることが伺える。私たち日本人も英語を話すことで関わり合うことが大切だと考えて

いる。
本時（4／5時間目）で児童は、④「同じまちで共に生きるために大切にしたいこと」を考えた。どの子もノブレッタさん親子やJOINの佐藤さんの語りに出てきた子など、具体的な相手を想像しながら考えたのではないかと思われる。他人ごとではない、自分事として考える授業ができたことを嬉しく感じている。授業を通して、子どもたちからは次のような考えが多く見られた。

（ア） 思いやり・優しさの大切さ

子どもたちは「笑顔や言葉で思いやりを伝えること」「相手のことを理解しようとする姿勢」などを大切にしたいと考えていた。また「お互いに優しくしていけば共に生きていける」「言葉が分からなくても分かり合おうとすることが大切」という意見も多く見られた。

（イ） 差別をしない・平等に接すること

「違いがあっても尊重して分かち合う」「外国から来た人も差別せず平等に生活できるようにしたい」など、差別をなくすことの重要性を挙げる声が複数あった。また、「不公平がないようにしたい」「外国の人も日本に来て良い思いをしてほしい」という意見も見られた。

（ウ） コミュニケーションの工夫

「自分からたくさん話しかける」「声をかけ合ったり助け合ったりする」「コミュニケーションが大切」という、相手との関わりを増やす意見が多かった。言葉の違いを越えて関わろうとする姿勢が表れていた。

（エ） 言語や文化を互いに学び合うこと

「言葉を教え合う」「文化を知り合う」「お互いの国を理解する」「外国語や英語を覚えるのも大切」という意見が多数あった。文化を伝え合うこと、知ろうとする姿勢を大切にしたいという声が目立った。

（オ） 誰にとっても使いやすい環境づくり（ユニバーサルデザイン）

「トイレなどにユニバーサルデザインがあるとよい」「日本語と英語の表記があると助けになる」「スーパーで困っている外国の人がいたら動きで伝える」という具体的な提案もあった。

（カ） 地域への願い

「言語が違っても、高田を大切にしてほしい」という、地域への思いを込めた意見もあった。

16. 授業者による自由記述

「ハロハロ」には「まぜこぜ」という意味がある。私は、多様な文化が混ざり合うことの楽しさや価値に気づかせたいという思いから、本単元を構想した。1時間目のハロハロ作りでは、どの児童も意欲的に取り組み、活動を存分に楽しんでいた。感想には「いろいろなものを混ぜて美味しかった」「家でも作ってみた」という肯定的な声が多くあった一方で、「混ぜれば混ぜるほど美味しいと思ったが、違った」「入れすぎるとよくない」という内容も見られた。これらの気づきは、多文化共生を考える上で重要な視点であると感じた。文化を「ただ混ぜればよい」のではなく、互いの違いを尊重し、それぞれのよさを生かしながら共に生きることが重要である。児童の率直な感想は、その本質を示していると受け止めている。

活動後、味の好みはさまざまであったにもかかわらず、すべての児童が「ハロハロ作りが一番楽しかった」と話してくれる。異文化との出会いは、必ずしもすべてが心地よい経験とは限らず、驚きや戸惑いを伴うこともある。しかし、別の側面を知ることで物事の見方は変わっていく。だからこそ、「まずは知ること」が大切である。本実践を通して、児童の姿や言葉から、その「知ること」の尊さを改めて実感した。今後の授業づくりにおいても、この視点を大切にしていきたいと考えている。またノブレッタさんやJOINのスタッフの方々とお話しながら教材化していくという過程は教師である私にとっても大変価値ある経験となった。現場や当事者の「声」を聴くことの価値を実感している。

外国語の授業を通して、「英語」という言語を教えるだけではなく、英語を話す相手の文化や価値観を想像したり、受容したり、相互理解を深めたりしながら、コミュニケーションを図っていける児童の育成を目指して、これからも研鑽を深め、授業実践に取り組んでいきたいと思う。

【参考資料】

・公益財団法人　上越交流協会JOINのホームページ　https://www.join-web.net/
・新聞記事（The post【社説】上越市の増える外国人市民数や、上越国際交流協会（JOIN）の先見性に見るfirst appeared on 新潟県内のニュース｜2025年5月13日：にいがた経済新聞）
・「上越の国際化を考える」、「創造行政」（上越市創造行政ニュースレターNo.44, July.2019）
・「新潟県在住の外国にルーツのある方の生活と意識に関する調査報告書」、公益財団法人新潟県国際交流協会・新潟市中央区社会福祉協議会（2023年6月）
・「帰国・外国人児童生徒の学校受入手引き（上越市版）、財団法人新潟県国際交流協会、2011年）
・佐藤睦子（2023）「散在地域に暮らす外国につながる親と子に寄り添って」、「子どもの日本語教育研究　第6号」、子どもの日本語教育研究会
・ 日本国際理解教育学会　編著（2022）『現代国際理解教育事典　改訂版』、明石書店